

19世紀を通して教会と政府、王党派と共和派など、しばしば世論が国を二分し、「二つのフランス」と呼ばれた状態が続くが、男性と女性の役割や立場の相違もより鮮明に表れている。革命以来、男性は科学や理性、共和政体を標榜し、女性はカトリック信仰を一層強め民衆レベルでの信仰実践を深めていった。ただ、男女間に信仰の断絶があったわけではなく、洗礼や結婚などの面において国民の90%以上がカトリック信者であるという事実は変わっていないのであり、制度あるいは組織としてのカトリック教団への態度と、圧倒的大多数の信仰としてのカトリックに対する心情には温度差が感じられることは注意したい。フランス革命以後、男性中心のフランス政界がカトリック教団を追い落とそうとやっきになるが、フランスを代表する奇跡の巡礼地ルルドに聖母が降臨したのは1858年である。1年間で20万ともいわれる巡礼者たちが聖地を訪れ、病人の世話取りの主役となって女性たちが大いに活躍した。リヨンのポーリンヌ・ジャリコ(1799～1862)のように、現代においても語り継がれるような宗教的活動を主導した女性も登場している。そういう意味では19世紀フランスのカトリック信仰は、女性の力によってかつてない活況を呈したともいえる。女性の信仰実践が表立って表現されるという意味では、もっとも進んだ時代と言えるかもしれない。共和主義対宗教の縮図は男女の関係性にも反映されていたが、カトリック信仰自体が完全に衰退したわけではないことは、十分に気を付けておく必要がある。

ライシテの重要な法律に1905年の政教分離法がある。フェリー法から政教分離法へと一足飛びに話を進めても良いのだが、その間にフランスの国中を巻き込んだ重要な事件に注目したい。ドレフュス事件である。「ラリマン(カトリック教会の第三共和制支持)」と言われるバチカンと共和派の一時の休戦期間を経て起きたこの事件が、ライシテに直接かかわると言えるのかは分からないが、少し触れてみたい。

事の顛末は以下の通りである。普仏戦争に敗北して20年余りを経た1894年9月、パリのドイツ大使館の一室で清掃員がフランスの軍事機密を記した一枚の紙切れを発見する。この清掃員はただの従業員ではなく、フランスの諜報機関の息のかかった人物だったと言われている。筆跡鑑定を唯一の証拠としてスパイ容疑にかけられたドレフュス大尉は、当時ドイツ領となっていたアルザス出身でフランスに帰化したユダヤ人であったが、1895年2月性急に進められた非公開の軍事裁判の末、あっさりと仏領ギアナへ終身流刑との判決が下された。士官学校で行われた軍籍はく奪の儀式では、「裏切者には死を、ユダヤ人には死を！」との怒号が鳴り響いたという。当時は国家のアイデンティティの確立をめぐる、反ユダヤ、反プロテスタント(新教徒はイギリスと手を組もうとしていると目された)の気運が高まっていた。

しかし、ドレフュスの家族が大尉の弁護に奔走する中、ベルナル＝ラザールというジャーナリストの支援を取り付けることに成功する。彼の呼びかけは多くの知識人の共感を得、エミール・ゾラも大尉の弁護に回ることになる。作家として名高いゾラであるが、ジャーナリストとしての活動も目覚ましく、その

本領をいかんなく発揮した舌鋒鋭い記事「われ弾劾す(J'accuse...!)」の影響もあって、論争は国家規模に拡大していった。軍部は軍法会議の判決を覆すことを良しとせず、反ユダヤ主義派とともに論陣を張り、共和派に傾いていた世論をナショナリズムの名のもとに吸収していった。ここでもまたフランスはドレフュス派と反ドレフュス派の二つに分裂したのである。結果的に1906年ドレフュス大尉の名誉は回復し、ドレフュス派の勝利で事件は幕を閉じた。

しかしながら、ドレフュス事件の「二つのフランス」はこれまでとは異なるものであった。ナショナリズム的な意識の高まりなどによって、世間の目下の標的は古くて新しい敵でもあるユダヤ人やプロテスタントらの少数派に移っていた。カトリック教会は革命以来反体制派となっていたが、ユダヤ人は古くからの仇敵でもあり、利害が一致する軍部側へと並びた。こうしてそれまで対抗勢力であったカトリック教会と労働者階級・社会主義者らが、ユダヤ人排斥を旗印に手を組むようになり、反ドレフュス派を形成したのである。これに対するドレフュス派は、学者やジャーナリストに代表される知識人たちであったが、徐々に宗教や人種、政治思想の枠組みを超えた大きな広がりを見せるようになった。人知れず葬り去られる可能性もあった一事件が、国家対一個人という図式で国全体を揺るがしたのである。

フランスの由緒ある人道団体「人権リーグ(La ligue des droits de l'homme et du citoyen)」は、国家による人権の蹂躪からドレフュスを守るために1898年に結成されたものである。「人権リーグ」は創設当初から多数のカトリック信者が賛同しているが、フランス革命が象徴するように、もともと人権とは政教分離をかけたキリスト教との争いを経て勝ち取ったものでもある。つまり、この団体によって人権という言葉はドレフュス事件の記憶にも結びつくことから、政教分離やライシテとこの事件とはあながち無関係とは言えないだろう。

ドレフュス事件において、カトリック教団が一般的な国民感情である反ユダヤ主義に与したとはいえ、その立場は必ずしもカトリック信者大多数の意見を代弁しているとは言えなかった。国全体の関心がただ一人のユダヤ系フランス人に注がれたその時に、一個人の人権をめぐる信教の枠を超えた論争が激しく繰り広げられたのである。

こうして、これまでの共和主義対宗教という一面的な対立構造は完全に破壊された。いわばドレフュス事件は革命以来の二項対立に取まりきらなくなった複雑な社会構造を浮き彫りにし、フランスにおける政教分離、ライシテ化が新たな局面に入るための前哨戦となった事件と言えるかもしれない。

[参考文献]

- Michelle FAYET, *Le Grand Livre de l'histoire de France*, Eyrolles, 2014.
Jean-François Sirinelli, *Dictionnaire de l'histoire de France*, Larousse, 2006.
Jean Baubérot, *Histoire de la laïcité en France*, PUF, 2010, pp.55-70.
谷川稔『十字架と三色旗』岩波現代文庫、2015年(pp.213-215)。
工藤庸子『宗教VS国家』講談社現代新書、2007年(pp.3-13, pp163-178)。